ルポルタージュ

開拓地の春

田添京二

1

ぼくたちを乗せたNHKのジープは、福島の市街地を抜けると、鋪装のきいた国道四号線を快調に南下する。昨日の雨は夜半にやんで、今朝の空はもう春の色だ。みちのくの春は遅いけれども、きた、となるとたたみ込むように、毎日毎日見なれた暗色の風景をあたたかにぬりかえてゆく。車の窓から見ると、右手に大きく吾妻山から安達太郎（あだたら）山への連嶺が、うす紫に感じられるかすみのかなたに立っている。いただきから中腹まで真白、針葉樹の緑をまじえた芽出し前の微妙なうす色の山はだがこちらに向ってすそをひき、後へ後へと飛び去ってゆく麦畠の青に、そして鮮かな菜種の黄色につづいてくる。

ウインドをあけたジープの中は、そとの春景色をうつしてにぎやかだ。「まるでピクニックにいくみたいだなあ」とぼく。「さっきお弁当はたっぷり仕込んだし」、これはプロデューサーのKさん。「あれが阿多多羅、あの光るのが阿武隈川……智恵子抄だなあ」と大学の同僚のS君。「おべんと食べてひるねして帰っちゃいたいな」、質問役のYアナは少し気が重いと見える。一番うしろできゅう屈そうにかがんでいる県開拓課のSさん、営農指導員のAさんもニコニコ笑って

いる。とたんにジープがはねる。鋪装が切れて砂利道だ。「チェッ国道がきいて呆れるわ」。松川事件で有名になってしまった金谷川の駅近くでその国道と別れ、線路を右に越えると、こんどは、安達太郎山にまっすぐ向って稲の苅あとだけの田んぼの間をゴトゴトとゆく。

田んぼがだんだんコマギレになり、ゴチャゴチャになり、ついになくなってしまうといつか車は山あいに入っている。ちょっと平たくなったところが、狼ヵ森（おいがもり）。ここに小さな山の分校がある。勉強道具をフロシキではすかいに背中に負った子供四、五人腰の廻りにぶら下げてジープに近よってきた先生に、上の開拓部落でお話しを、とお願いしてまた出発。

こんどの途はすごい。いまの先生が、車が入ったことのない途だが、と首をかしげていたのも無理はなかった。ジープは両側の灌木にたたかれ、ローで行ってもピョン〳〵とび上がって、腹をする。「やっぱり国道はよかったなあ」、デンスケだけはとひざに抱えたKさんの情なそうな声に、皆ふき出すが、運ちゃんは真顔だ。「すいません、ちょっと降りて下さい」。見れば小さな溪流みたいなのが途を横切っていて、その先、ひどい傾斜が十米ほど続いている。「二キロ歩くのは辛いぞ」「いや何とかなります」。やっと車がのし上って、一同のり込む。山の鼻を一つ曲ったらあやしげな一間ばかりの橋ときた。また降りる。ソロソロとゆくジープの前輪がかかったと思ったら、グラッと傾いて、危うくとまった。橋はいとも簡単に崩れている。「歩きだな」。「これが僻地の僻地たるゆえんですな」。運ちゃんを残してともかく登り出す。「妙な途だ。途の両側でなくて真中に排水溝がついてやがる」、皆ぶつくさいいながら、山石のまじる白茶けた土をふんでゆく。急な登りだのに寒い。気がつくとすぐそこまで迫った山はだには、まだ草色の一点もない。NHKのモダンなテレビ塔がついこの間建った笹森山のあたりには、灰色の雲さえまいて、陽差しまで何かドンヨリしてきた。

「あ、着いたぞ」。雑木林をぬけたとたん視界がひらけて、山あいの台地に立っていた。山畠がゆるい傾斜で続いてお

り、そこここの山のひだにこびりつくようにして、小屋が見える。しかしこれが畠というものか。ついさっき見た麦畠は、威勢よく一尺近くにも育って、黒土の畝間も狭しと緑の葉先をそろえていたというのに、この麦はどうだ。うねにそって眼をやると、火ばし位の色の悪いのが、チョボ〳〵とあると思えば、芝生みたいのが続き、その緑は、さっき踏んできた砂のような灰いろの土に吸いこまれてしまう。一尺向うにまたチョボ〳〵。麦よりはるかに元気そうなメヒシバの芽とオオバコ、もう冬越しのロゼットから手足を延ばし出しているジシバリ——まるでこっちの雑草どもの方を育てているような畠だ。下界はうららかだったが、ジープもエンコするあの悪路は、春をも拒んだと見えて、笹森山と中作山にはさまれた標高四百米を超えるここ、笹平は、まだ冬だった。

2

殺風景なあれ畠の中に、ポツリポツリとたっている小屋——学生時代、敗戦直後の東京の焼けのが原に生れたいわゆる濠舎の実態調査をやったことがフトよみがえってくる。バラバラと子供たちがかけ出てきた。ひねこびた径二寸ほどのリンゴの木がいく列か植わっているうしろの小屋が、ここ笹平開拓農協の組合長さんのところらしい。子供たちが御注進に及んだのか、不精ヒゲの顔色はさえないが、ガッシリした肩をゆらして四十位に見える組合長さんが出てきた。ソダの煙で眼をシバシバさせながらごあいさつ。せまい家の中には、近くの人たちが沢山集っていてゴッタ返している。きけば農協婦人部をつくって一周年とか、丁度部落みんな——といっても二十二戸、百二名なのだが——でお祝いをやらかそうというところなそうだ。それではゆっくりもしていられない。早速に、開拓に入った当時の想い出話からきくことにする。

「ありゃあ終戦の翌年だなあ。昭和二十一年でした。今いる者の半分位が始めに入植して、そのあと二十三年と二十七年にも、八軒、五軒とふえたんです。」「大体が、戦災と引き揚げですよ。ずっとしもの百姓の次男坊や三男坊で増反に

きたのもいるけんど……。」

子供たちは、デンスケのテープが廻るのを面白がってワアワアいうし、土間では、お祝いのごちそうをきざむ音、せとものぶつかる音、しゃべる組合長さんもマイクを気味悪がって少し調子が固い。技術の人たちにダメを出されそうだ。ソッと録音中止のサインを出しといて、わざと雑談をやる。しばらくすると大分口がほぐれてきた。

「入植した当時はね、この家のしもに丈余のクマザサがあったんです。われわれ入っても歩けなかったです。そんなかうさぎの野郎でさえ通れなかったようです。まあこんなとこさきて仕事せなきゃならないかと思うとザワザワしちゃったですね「ゾッとしたという意味」。」組合長さんが、クマザサといっているのは「ねまがりたけ」のことだ。春先むっくり落葉をもち上げるかわいい竹の子は、山の宿か、都会の料亭でおめにかかれる。ミソをあしらうと実に美味しく柔かく、しかも歯ざわりのいいものだが、それは新芽のうちだけ。育ったら、その強靱なこと、地下に縦横にのびる根の仕末の悪いこと、開墾の最悪の敵の一つだ。

「それもね、百姓なんてまるきりやったことねえのばかりでしょ。私もね、ずっと軍隊で、ひと殺すのの方は訓練されちゃったけど、硫安も知んなかったです。加里、窒素てのも分らなかったんですからネ。だから、入って「入植して」きた人は、皆、白い粉ちゅって買いに行ったんですよ。それもお砂糖位の配給量しきゃなかったんですから、コリャ無理だったです。余計入れなくちゃならねえ所へチーッとの配給でしょう。」ひとしきり、なれぬ百姓仕事の辛かった話で皆テンデにしゃべり出す。「何しろね、豆買ってこ、つって豆まいたですがね、いつまで待ってても芽が出てこねえ。おめえあれ、どんな豆買ってきた、ってよくよくきいたら煎り豆買ってきゃあがって……」ぼくたちもふき出すし、奥さん方に至っては、キャァ〳〵と大笑いして、涙をふいている。余り笑ったせいだけなのかどうか、ぼくには分らなかった。

おかげで、婦人部長さんがしゃべり出す。戦災で東京を追われたという三十すぎの方。「やっぱり百姓なんて知らなか

ったから、干ばつだ、冷害だっていうと、チョイ〳〵東京へ逃げて帰りたくなりました。畠をつくってから二、三年はちょっと取れましたがね。それでまあ楽しみに始まったんだけど、あれいつだったっけ冷害と霜害の年……」「二十八年、九年でしたね」と指導員のAさんがはさむ……「その時おかぼ四反ばかりつくったんですがね、冷害でモミ二、三升……ワラばっかりでね。もういやんなっちゃって……そうするとこんど干ばつでしょ、そのあくる年〔三十年〕。だからもうよくよく百姓やんなっちゃって……。」

事実、この開拓部落でも六戸の農家が、すでに逃げ出している。だが逃げ出せる人たちはまだしもなのだ。離農するとなれば、つもりつもってかなりの額になっている、さまざまの貸付資金を償還しなくてはならぬ。そんな金を持たない連中は、いやでも借金にしばられて居続けるほかないのである。

組合長が受けて「一番はじめイモつくったっけなあ。苦労して苦労して、一杯ハッパが茂ったから胸ドッキ〳〵堀ったら、一サンチぐらいの太さのばっかりだ。一サンチですよ。」いかにも兵隊あがりという感じの一サンチにうたれたぼくたちに小指をつき出して見せる。ゴツイ手。平べったくて大きな爪。「そんなだから、二十八年と九年の時には、この地区みんなで民生保護〔生活保護法による生活扶助のこと〕、集団民生保護受けたんです。全戸ですよ。そしたら県からお役人さんおこってふっとんできたっけ。ふっとんできたってしょうがねえ、喰うものねえんだから。」組合長は、開拓課のSさんの顔をうかがいながら、いっそ小気味よさそうに言い放った。

むろん生活扶助は世帯単位がたて前だから、「集団」保護などという制度がある筈はない。ぼくもこの話にはびっくりしたから、当時、お役人はさぞあわてたろう。ぼくは、都市部の生活保護世帯をかなり見たことがあるので、そのくらしの中味がどんなに物すごいものかを、いくらか知っている。部落全戸が——右手で歯のない口をあけてる人の良さそうなおばあさんや、デンスケに素朴な驚嘆を示しているこの子供たちまでが、あの生活水準に落ちたのか……。しかしぼくは、

誰に向って、ともないムシャクシャと同時に、この人たちの発散するあるたくましさ、とらわれない強さをも感じていた。大体僻村では、いくら貧乏してもよくよくの場合しか、生活扶助を受けない、あるいは受けられない。そうした役場の人と話していると、ここは保護者が殆んど居りません、などと手柄顔でいうのによくぶつかる。いよいよ困って扶助の申請をしようとすると、大てい親類とか、特に本家とかいったところから文句が出る。お前の働きがねえのに、お上に届けておれたちにつらあてするんか。うちの親類はちっとも助けてくんねえと村中に言い立てる気か、といった調子だ。そこまでゆかなくても、そうなることを予想してるから、申請しようかと思ってる家の方でもすくんでしまう。法規の側でも心得ていて、「補足原理」というやつをふり廻し、身内の家からの援助を強制する。手を尽くして、それでも暮しが立たない時には、法がたしまえしてやろう、というのだ。だから、それを押切って保護を受けてもあとが大変だ。「あすこは国家公務員様だとよ」、「あのかかあは前から乞食根性が強かったな」、「お上から金もらってブラ〳〵してるでねえか」、「何か貯金までしてるっていうぞ、」——まあこんな工合である。

ところが、いま眼の前にいる人たちは、昂然とむしろ扶助をかちとった、といわんばかりの様子なのだ。ここには、僻地をめぐって、どこでもおめにかかる部落制度や、家父長制のしがらみがない。外地で暮らし、都会に育った引揚者や戦災者がより集っているだけに、いまやっている百姓の暮しを、前の暮しと比較し、批判する眼を持っている。そして、開拓民として国や県の政策を受けとめるその局面で、開拓政策そのものの貧しさとつじつまの合わなさとを鋭くかぎつけている。ほかの典型的な僻地の人と話している時、ヒシ〳〵と伝わってくる何か陰にこもった感じがないのだ。開拓者が、保護基準すれすれのいまの暮しの壁をつき破ってゆくとすれば、その力は、このあけっぴろげでしかも批判を失わない物の見方と結びついて育ってゆくだろう、と思われた。

3

先刻から、Yアナをつついて、営農上の苦労に話を切りかえようとするのだが、仲々そこへゆかない。「山あいだから日照時間が短かくて困るんじゃありませんか。」「ウーン。冬が長いでなあ。冬の夜っては長いなあ。新式のテレビ塔の下で、こっちは、スス出してランプ生活だものなあ。」ぼくの方にして見れば、そういう暮しの不便については、あとでまとめてききたいところ、横から口を入れてはぐらかしてしまうこの長老格のおじいさんには弱ってしまう。

「人手の不足は感じませんか。」やっと組合長さんがのってくる。「大体ここは労力が足りないです。うちも、二町四反に対して働けんのは夫婦二人でしょう。それに、子供あれば、当然……あの、かかあはダメでしょう、もうコレハ。オブザバーのかっこうですよ、かかあってのは……。」言いも了らないうちに、奥さんがたが、一せいに騒ぎ立てる。ぼくらも observer でなくて、「オブザばー」とのばした感じが、すっかり嬉しくなって、頭をかいてる組合長さんの姿に笑いこける。

「それに、いますぐあしたの米を買う金を何とかしなくちゃ、という訳で、みんな男が働きに出ますし……。」途中から加わった分校の先生が話の筋を立て直してくれる。「この頃の県の指導はね、手を杉の皮のように荒れらかして、炭焼仕事なんぞやってることはねえんだ、と。それよりも乳牛を飼って手を美くしくしてかかあと二人でそのちちでものんですね、まあ楽しくヤレ、ということなんですがね。けっこうな話なんだけど、ところが、そうなるまでに今日のめし喰わなくちゃいけないんですから。そんで喰わなくちゃなんねえから金とりに出る。金とれば開墾はできねえ。開墾ができねえからまた金つくらなくちゃなんねえ。すると営林署さ出て金とりだ〔営林署の日雇で日当を稼ぐこと〕。だからも少し県で金かしてくれればねえ。」組合長は最後のところを県のSさんの方に向けていう。きけば、今日も男手ばかり二十

人が、営林署の伐採に出ている由。どうりでさっきから老人と女子供の多いところだと思った。

ぼくたちが笹平を訪ねてから三年たった昭和三十七年二月一日現在の調べでも、一戸平均約二町歩の開墾計画農用地のうち耕作されているのは、約一町七反、一割五分の面積が遊んでいる。この進捗率は丁度県全体の平均に等しい。そして全体の三分の一、七戸が日ぜにかせぎに出ているし、十六戸が炭焼きをやっている。元来、開拓地は、先祖代々永年の労働をつぎこんできた田畑に比べると、何倍もの労力を投入しなくてはいけないわけだが、実際はむしろ逆なのだ。一戸あたり一町七反あれば大したものだ、と思うかも知れないが、広さばかりあったって、悪い自然条件が重なっている上に、経営も大まかたらざるをえないから、みのりはうすい。高冷地で冬が長く、山あいで日照時間は短かい。水が冷たくて水田には極めて不利だ。土が悪いところへもってきて傾斜地だから雨がふれば表土はどん〳〵流されてしまう。そこへもってきて安達太郎から吹きつける偏西風のおかげで、風蝕がひどく、かわけばかわいたでまた表土がとんでしまう。ふってもダメ、照ってもダメ。だから肥料もちがわるいのに、入れる肥料の方は、十四戸までが、ふつう農家の半分以下量の化成肥料と堆厩肥だけに頼っている有様だ。

平場の農村が、有史以来の豊作にわいていた昭和三十六年の出来秋に、ここでは、九戸がやっている計一・九町の田んぼからの水稲がたった二・九トン、反当りにして一五二キロ、約一石、二十戸の作る三町三反から、陸稲は平均六二キロ、まあ一俵といったところなのだ。福島県の開拓農家全部の平均反収はというと、同じ年に、水稲が丁度二石、陸稲が一七一キロ、一石一斗四升だから、水稲が半分、陸稲が三分の一位しか出来ないことになる。県内の農家全体を見ると水稲が三石、陸稲が一石半。この勘定だけでゆけば、笹平の一町七反は平場農村の五、六反にしか当らない。

その上でていねいに、ここでは熊の害だってばかにならない。ぼくたちのいったつい一週間前にも、すぐ上手の山へ造林の仕事に出かけた営林署の人たちが、でっかい奴にとび出され、青くなって逃げ帰ってきた、という。去年は婦人部長

さんのところがひどかったらしい。「夕方とか、朝とか、そんな頃出てくんのね。そしてモモなんか……、まあとても頭が良くって、こっちがそろそろもぎに行こうかと思ってると、出てきて食ってっちゃう。モモ畠のまん中にドッカリあぐらかいちゃって、おなかの前に集めといて、一反やそこら一ペンに食べちゃうんだから。」「しようがないからモモでもトウキビ「トウモロコシのこと」でも、熊の余り物、子供にやってんですよ。何かイノシシには防除対策費とかってお金が出るっていうんだけど、熊じゃダメなんですって……。」組合長も、何故熊ではいけないのか分らんといった風に首をかしげながら「だからどうも、イノシシには補助あっても、クマにないというのは、コレ不公平だね。」

先刻から、苦情の出るたんびに、相手を納得させはしないにせよ、手際よくお役所の立場から筋途の立った意見をはさんでいるSさんがどう答えるかと、横眼で見たが、今度ばかりはニヤ〳〵しているだけ。あるいは、かつてイノシシ地帯から、クマ地帯のよりはるかに有力な議員さんか、大臣でも出た、といったことかも知れぬ。何にせよ、イノシシなら金を出すが、クマには出さんというやむにやまれぬ理由を、誰にも腑におちるように説明するのは相当骨だろう。

4

「ここへ来る時の例の途、あれが開拓やる上にどうひびいてますかね、」きき役のYアナが話をすすめる。組合長さん、それそれ、といった思い入れでのり出してくる。「まことに道路ができていないがために、何割の損失だか知れないですね、コレハ。何だろうと荷物は、オート三輪でも庭先へ持ってこらんないために、皆しもの入口へ置いて帰っちゃうでしょ。で、肥料きたといえば、すぐビニールもってかぶせに行かなくちゃだめでしょ……雨ふらっちゃうから。それから背中へあげて背負うんでしょ、全くアリが物運ぶといっしょです。それで肥料代は同じなんだから……これも不公平かな」。不公平かどうか考えてだろう、まくし立てたスピードが落ちたとなると皆一せいに口を出す。「こっちはそこか

ら、一日とか半日とかかかって運ばなくちゃなんネィ」、「人手がたんねえっていうによ……」。

組合長さんが話に追いついて「物を出すにもそれと同じかっこうでしょ。そんだから余り重いもの、野菜なんかの作づけはしないんです。まとまった菜種とか、豆とかに限定されちまうんです。」婦人部長さんが受けて「去年から乳牛かい出したんですけどね、ほかとちがって、乳しぼりは朝三時半に起きんです。下までかついで出なくちゃいけないから、そでないと間に合わないんだものねえ。」

「途をひろげるとか、良くするとかという計画はないんですか？」とYアナ。「人手がねえし、おれらが直した位では……。雨がふれば途の真中、水がツァーっと流れっちゃうんですからね。川と一緒です。でも皆で集ってやるから前よりは少しは通りよくなったんです。営林署で馬に材木ひかして通るもんで……下の橋もその度に落ちるから何回直したか分んねえですがね。ついこないだも皆出て半日使って直したんだ。」とたんにぼくたちは一せいにあやまったり、頭をかいたりした。さっきジープで無理をして橋を落した時には、ちょっとした危険感と、歩かせられる不平とで、ブツ〳〵言った訳だったが、その身勝手さに皆共通にハッとした形だった。それにしても、ここの人たちにして見れば、大切な日銭稼ぎのおつとめ先だからだろう、言葉を濁してあからさまに言いはしなかったが、営林署の道路の使い方には、弱り切っているらしく思えた。材木のまま馬に引かせたあとの山途というやつは、全く始末に悪い。材木の通ったあとだけツルツルにえぐれて、人は、馬のひづめのあとでもたどらないと、登るも下るも容易なことではない。

ほかのいわば典型的な僻地とちがって、ここ笹平開拓の場合には、悪路を何十キロも山奥に入らなくてはならないという訳ではない。せいぜい二キロ。その二キロが春景色の下界との自由な交流をさまたげ、営農の上に甚だしいハンディキャップを負わせているのだ。もう一米も道幅を広げて、二、三ケ所の橋を直し、急傾斜の二ケ所ほどをならせば、オート三輪は楽に入れる、と素人めには見えた。何も東京のド真中で坪二百万の三百万のという土地を買収しなけりゃ拡げもな

らぬ、というのとはわけがちがう。廻りは見はるかす荒地と雑木林だ。うまく開拓道路関係補助金の予算でもつけば、笹平の人たちも、同じ日銭かせぎの労働にせよ、どんなに嬉しがって働くことだろう。結局二十二世帯五十票たらずでは、町議さんでも見向きもしないということなのだろうか。もうかりさえすれば、右手にかすむ吾妻山の千六百米の高さまでスカイラインを通すというのに、……いっそむしろ旗おっ立てて町役場でも県庁でも坐りこめ……。いやいやそれもあぶないかな。何しろ、つい二、三年前にも政府から渡された補助金を他に流用してしまって、開拓道路補助金の枠がとれた、と勇んで工事を了えた地元にはしらん顔をしていた、とい うそのような実績を保持している福島県のことだ。笹平の現状で、もしあれの二の舞をやったら、それこそ眼もあてられないなあ……ぼくは燃え上るソダを見つめながら、プップッと小枝のハゼるようなふんまんが、ぼくのおなかの底にも湧いてくるのを感じていた。

昭和三十年以来、福島県は、地方財政再建促進法による財政再建団体、いわば余りの赤字で後見役の国のいう通りにしかお金を使えぬ禁治産者に指定されていた。「只飲み川」といわれた只見の大ばんふるまい、東北の三馬鹿なぞといわれながら、県財政の赤字が急増している最中に七億を投じた県庁舎の建設、そんなことも加わってこの当時県の赤字は二十三億に近かった。その年の夏の終りになって、あちこちの開拓組合がブーブー言い出した。開拓関係の各種補助金をさっぱり渡してくれんじゃないか、おれらにかした金の償還いうとちょっとおくれてもすぐこわい顔してとんでくるくせに、筋の通らん屁理屈ばコネおって、もうすぐ、もうすぐがききあきた、さあこんどははっきりしてもらおう。騒ぎが大きくなって、新聞がとり上げる段になって、やっと県もあわて出した。金は、政府から県へは、とっくに渡っていたのである。総額約二億円。県は、その金を開拓農民に渡さずに、他の「緊急を要する」方面に流用していた、と認めて、一返にはだめだが、順次至急支払うよう努力する、と、授業料を飲んでしまって、親父に追求されてる学生さんよろしくの弁明をやったものだった。

5

ふと気がつくと、土間の方は大分静かになっている。おばさんたちが、前かけで手をふきふき、いろりばたの話し合いに加わってくる。きっとお祝いのごちそうも一段落ついたのだろう。時計に眼をやると、もう十一時を廻っている。後を急いだ方がいい。きき役のYアナに、「償還金のこと、きいて下さい」と書いたメモを送る。

開拓農民は、実にいろんな名目の、貸附利率も、据置期間も、その他の返済条件も多種多様な資金を、国、県や、農林中金等の系統機関からかりている。農民自身は大てい、何をどの位かりたんだか、いくら返せばよいのか分らないのが普通である（三十五年から政府資金だけは、三分六厘五毛と五分五厘の二本に整理した）。こうした借金の返済がまだ暮しのメドも立っていない開拓者にとっては頭痛の種なのだ。

Yアナが、マイクを自分の方によせて、「償還金の……」といいかけたと思ったら、二、三人いっぺんにしゃべり出そうとする。Yアナがあわててマイクを向ける。「イヤ、償還金にはみんな泣かされてるです、コレハ。……」。皆をおさえるような手つきをしながら組合長は、いいたいことが山ほどあって何からしゃべってよいか分らぬ、といった風に言いよどむ。すぐお年よりが割りこんでマイクに喰いつきそうに首をのばす。

「県のひと前にいうのもなんだが、そりゃあ酷なもんだ。わしら決してズルして償還おくらしてるんでねェんだ。そんなこたあねェ。来て見りゃすーぐ分んだけど、フントニどうにも返せねェ時があんだ。おれ、それ分ってほしいんだ……」

白髪のこめかみに青筋を浮かして一息にしゃべるおじいさんのことばに、県のSさんもAさんも、うなづくだけだ。組合長があとを引きつぐ——「ほんとです。償還できないと、組合の連帯責任になるんです。組合が立て替え償還なんてい

うと大変なこと、みんな知ってるから、返せるものなら返したいんですよコレハ。それに、いまやっている麦とか、菜種とかとり入れるでしょ。そん時償還ちゃんとしないと、秋の肥料代金が廻してもらわんない。そうすっと、どうでもおさめなきゃいかないから、自分の畠ほり出してぜにとりしてきてでも償還すんです。」

二、三日前からの泥ナワ勉強で、昭和三十三年度、県全体の償還成績が十四%、すなわち年度内に償還すべき金額が約六千三百万円、実際に償還されたのが九百万円なにがし（後で知ったのだが昭和三十四年度には、四%まで低下した）ということをきいていたぼくは、思わず「それで償還成績は?」と口をはさんだ。「いいんです、ここはとても……」指導員のAさんが答える。出がけのジープの中で、同じAさんから、笹平は営農不振地区だと教わったのとチグハグだな、と首をかしげた時、組合長さんが、精一杯の皮肉な調子で、「そりゃそうですよ。償還ではずい分いじめられたもんだから……このAさんなんては、償還の鬼っていわれてたんですからね。Aさんくっと償還、償還だから……」あとは、皆がドッと笑い出してききとれない。Aさんも面と向って「鬼」といわれては、頭をかいて一緒に笑うしかない。

県のSさんがうまく割って入る。「いや、われわれだって、皆さん大変なことはよく分ってますよ。償還が始まったのが、昭和二十六年からで、まだ営農の基盤が固まらないところへかかってきましたからね。そこへ冷害、旱伐とあったから、三十年からは、償還成績がどこでも落ちたんです。しかし、こちらも延期を認めたり、手は打ってるんです。この頃は条件のいい資金をどんどん出してるし……。」「そこなんですよ――と組合長が目をむく――もしあの当時、いまみたいに五万とか十万とか、ポッと大金が借されたんだらね、もっと何とかできたんですよ。何しろ当初の営農資金てものが、あの当時の金で五千円位が戸別に借された。始めて毎日が苦しいから、何となく腹へ入っちゃったね。あんまりチットだものね。ところがそういうのがつもりつもって、いまになって見れば、十万、十五万でしょ。この償還が大変だ、大金だから……。その償還するについて、県なり、農地事務所の対策が、償還畠をつくれ、と、こうだ。まことに、われわ

れから償還吸い上げんがための指導だったんですよ、コレハ。」

すっかりヤブヘビになってしまったSさんは、「イヤィヤそうじゃぁない……」と説得にかかるが、開拓の人たちの方は、絶対きこえませぬ、といったつらつきだ。「償還畠に何をつくったんですか」、Yアナが話をかえる。「菜種ですね、あの頃換金作物としては有利だったんです」とAさんが受けとる。「菜種二反歩つくれ、と。二反歩つくって三俵とれれば、六千円にはなる、とこうですからね。そうでしょ、Aさん。」組合長は追撃の手をゆるめない。

「いや、そんな訳では……、まあ、その開拓が辛かろうってことは、承知してます。平場の農家だって、仲々楽でないのに、畠作だけの経営で、ここらの平均で年に一万五、六千の償還を余計に背負ってる形ですからそりゃあもう……」、Aさんが一歩後退したところで受けとめようとしたが、組合長さんはこの防禦線も突破してしまう。よくよく文句の種がたまってるんだろう。「一万五、六千ならいいですよ。ほれ、あのウシ、和牛かりた人は三万ですよ。あんなのまで返さにゃならんのだからひどいです、コレハ。」「二十七年に中期資金で和牛を入れたんです」、とAさんがボクたちに向って言う。ボサボサ頭のアンチャンが、口をとんがらかしてボヤく——「畠なんかいい加減にして、酪農やれ、酪農やれ。酪農は楽農だ、って指導されて借りたけど、皆、ありゃ苦農のまちがいじゃあんめえかっってるです」。

組合長さん、うなづきながら、後をひきつぐ。「ここで家畜がふえないってのはネ、はじめにアレで失敗したからです。」「あの頃は牛も高かったしねえ」とSさんが柔軟作戦に出たが、これがかえっていけなかったらしい。組合長の語気が荒くなる。「コ、コ、購入が、国からの購入が高くって、こんだ国庫の購買が安かったんですョッ。こういうことだから危ねえぞ、ということでもう皆しぶっちまった……」

SさんとAさんが一緒にしゃべり出す。「ウン、それはやっぱし一般市場がそうなんだからな。ひとり開拓だけがそういう状況なんじゃない。たまたまあの頃の奴は、どこの地区行ってもそうなんだね。和牛が五万位したでしょ（そうで

すよ、と組合長が相の手を入れる）それがこんど売る時になれば二万（そうですよ）、一万五千位の時期もあった。」「だから親まで売って償還に足んねえんだから、コンダラ牛買ってたらどこまで損しちまうべっていうんで、誰も飼わなくなったんですよ。だからあの当時の和牛で今いるのは一匹もないでしょ。ミーンナ喰っちまった。」ワッと爆笑が起る。「元も子もなくなって、借金だけ残ってんだから……」組合長さんが、重ねてつけ足すまでもなく、Sさん、Aさんの抵抗も、「ミーンナ喰っちまった」の一撃でとどめをさされてしまっていた。

Sさんや Aさんも認めているとおり、営農の基礎が固まっていない開拓者のつましいふところから、これだけの償還をすることは本当に大変なことだ。この他にも、町民税、固定資産税などで一戸平均四千円近くは負担しているという。この年（昭和三十四年）二月一日現在の営農実績調査を見ると、笹平二十二戸の開拓農家のうちで、年収二十万を超えるのはたった二戸だけ。半数が十五万以下である。この年収という中には、日銭かせぎのニコヨン仕事の手間賃も入っているが、主なのは、いわゆる農業粗収入というやつである。農業粗収入だから、それは一年間にとれた作物はむろんのこと、山で焼いた炭も、山羊がうんだ赤ん坊も、子供のオヤツにしたひねこびたリンゴも皆お金に換算して入っている。ただ来年まく種子、家畜に食べさせた飼料、畠にスキ込んだり、堆肥にした分だけが除いてある。従って、農家経営をやってゆく間の肥料代、農薬代、農機具代等々の諸経費は、皆この十五万なら十五万のうちから出さねばならない。粗収入十五万というのは、サラリーマンが、年間もらった給料十五万というのとは大分訳がちがうのだ。同じ年の県内農家の例から推定すると、この程度の粗収入の農家だと、大体その三分の一が経費になっている。して見ると、年収十五万といっても、経営費五万と、償還金、税金二万をとると、実際に家計に廻せるのは、せいぜい八万、月にして六千七百円になってしまう。これで一戸平均五人の暮しを支えるのは無理だ。生活保護法による生活扶助基準よりずっと低い。実際には、こ

んなことをしたらそれこそ死んでしまうから、結局、やむなく経営費に喰い込んでしまう。だからますます収獲は落ちる。その日その日の糧に追われて、これじゃジリ貧と分っていながら、経営費を確保できぬままに十何年も経ってしまっているのだ。お役所の調査だから、上っつらしかつかまえてないんだろうなどと思ったらまちがいだ。一般農家とちがって、お役所は金を貸付けている立場だから、銀行が貸附先の会社の営業状態を睨んでいるのと同じように、いやそれ以上に、詳しくつかんでいる。ニワトリの生んだ卵の数、焼いた木炭、使った肥料がどの位か、皆知っている。商店なんかとちがって、ここではズラッと見渡せばそれで分ってしまうのだから何とも仕方がない。

ともかく、営農費を喰って、年間十万を生活費に廻した、として見たところで、よくよく辛かろう。キチンと査定すれば、恐らく現在のままで大半のお家は、生活扶助適格だろう。

ここは営農不振地区と県からハンコを押されたところだから特別ひどいのか、というとそうでもない。三十五年二月一日現在で県内の開拓農家は、八、八七六戸、そのうち農業粗収入（だから農外収入は加えてないが）十五万未満の農家は、三十一％の二千七百余戸、二十万以下が全体の六割に近い五千戸余を占めている。この年の県内農家の粗収入平均が三十二万なにがしだから、大まかに半分だ。二百万と百万、といった半分ならまだしもだが、こんな低い水準のところでの半分はエラい。要するに県全体とって見ても、開拓者は、笹平の場合と大差ない、すなわち生活保護以下か、スレ〳〵の暮しを余儀なくされている、といってよいのだ。尤も現実に保護を受けているのは八、八七六戸のうち一九三戸。一千世帯に対して二十一の割になる。県全体は、というと、一千世帯に対して三〇だから、ここからだけいうと、平均的に一般県民は開拓者より五割かた貧乏人が多い、ということになる。何かスラッとは呑みこみにくい数字だ。

6

テープが巻き切れてしまって、Kプロデューサーが、あわててとりかえにかかる。放送用のは、音質が大事なので、一九・五センチで廻すから、五号テープが十五分しかもたない。話がとぎれたので、組合長さんが座をはずす。ぼくも、もうゴザをしいた板の間に一時間半も坐り続けで固くなってしまった腰をのばしに外へ出る。県のSさんも出てくる。「仲々大変なところですね」、水を向けると、「ええ、こんな開拓ばかりでもないんですがね。ここは、条件が悪いです。それにいくら言っても畑にジシバリばかり生やかしといて。……。赤ん坊の生産力の方は、いやに高いんですがネ。」「それはね――これも続いて出てきた指導員のAさんがニヤニヤしながら口をはさむ――無理もないですよ。ランプだし夜が長いでしょう。することもないと寒い季節には、晩めしすむと寝どこにもぐっちゃうから……。」ぼくも笑いはしたが、いやな後味だった。ほかの僻地でも何度かきいたことだし、それは事実なんだろう。ただ、さっきからマイクを前につるし上げを喰った形のはらいせを、ここでやっているといった臭いがした。あるいは「償還の鬼」が、グッときていたのかも知れない。ともあれ、電気がない、というのは、よくよく大変なことらしいな。さっきから、電気の話ばかりしたがってたけど、残りのわずかの時間、これをまとめてきいて見ようか――真ひるだというのに、妙に輝きのないうす日がところどころ差している雑木山を一つ見廻して、家の中に戻る。

組合長さんは、土間で何か、お祝いの指図をやっている。先に始めることにして、見廻すと、イキのよさそうな若者がいる。午前中の仕事を終えてきた下の家の長男だという。早速マイクを向けて見る――

「電気ないのはひどいです。組合でまとめてモーター位買って、と思ったって、電気なけゃだめだし、……たまに町へいくとヒーターなんてあって、あれはちょっと物あっためたり、お湯わかしたり、便利だろうなと思うけど……。どうや

って使うんか分んねえけど、電気のいろんな便利なもの出来てるですね、いまは。」

全くいま時、どんな貧乏な家にいったって、凡そ電気器具の一つもない家というのはあるまい。この組合長さんの家も、その点では実にサッパリしている。

分校の先生が話し出す。「来て間もなくでした。電燈ないこと、ついうっかりして同じ字を五十ずつ書いて来いっていう宿題出しちゃったんです。そしたら、夜になってそういう宿題できっこないこと、先生分らねえんか、ってとても叱られました。それに帰れば、子供なりの仕事をみんな持ってますから。その仕事におわれ、あともうつかれてねるだけ……という工合ですね。」

いまの若者が顔をしかめるようにしてしゃべり出す。「小学校一年の時入植したんですがね。その当時、学校に通うのが四キロですよ。そうすっと往復八キロあるって、家へ帰って、家中に一つのランプで勉強するっていうとオダヤカでないんですね。そうすっと、学校行けば、また宿題やって来ないって先生に毎日いじめられる。学校もだんだんいやになってくる。皆が話してるラジオの何だかの劇のこともこっちはまるで知らないし……。新聞見るったって朝のが夕方でしょ。朝刊が夕刊になる訳ですよ。そうすっと、一般の下の青年に負けてくんです。何となくヒケ目とってくんです……。自分で働いてやっとこないだラジオ、あのトランジスタですね、そいつ買ったんです。」

自分の席についた組合長さんが、ほほを引きしめていう——「電燈ないとね、話し合いってできないもんです。ひるは皆忙がしいでしょ。より合いなんか夜やっても、うまくまとまらないです。おたがいに話が見えねえんだ。」

「話が見えねえ」とは、うまいな、ぼくは思わず嬉しくなって、組合長の顔を見たが、彼はおこったようにまじめな眼つきだ。せきこむようにどもりながら「ゲ、ゲ、原始時代ですよ。原始生活ですよ、まだわれわれは。全くもう……人間として全くこれが最低の生活だ……ソ、その為に、あすの働く意欲も出ないんだっ」組合長は、ほんとに絶叫した。ぼく

たちを睨みつけるようにして。

ぼくは、凝然として、ピクピクふるえている組合長さんの口許を見ていた。頭からスーッと血が下がってゆくような感じだった。対話のはじめっから、営農上の技術的な苦労や、経営上の隘路を引き出そうと質問するたびに、電気もない暮しの訴えが答えにとび出したことの意味がやっと分った。うかつな話だ。

人間らしい暮しもさせないどいて、労働だけ人並み、いや人並以上に要求してくれるな——さっきから皆はそう言いたかったのだ。「原始生活」をやっているところへきて、耕土培養法がどうの、PHがいくらのと、何をいってんだ、働け、もっと働け、もっと利口になれ、か、はたから尻たたかれる前に、こっちは、飯くうひまもおしくて飛び出すから、皆胃病になるほど働いてらあ。それでも喰えねえのは、おれたちがまだまだ怠け者だからだとでもいうのか——おそらく組合長さんは、そうどなり出したかったんじゃなかったろうか。

しばらくはテープの廻る音だけ……。「楽しみっていえばね——ちょっとテレくさそうに、ぼくたちを見廻して、こんどは静かに、組合長さんがしゃべる——一年に一度、ここの組合の総会やるんです。選挙だのお金のことだのすまして、皆で呑むんです……一年間溜りに溜ったうさサはらすってわけだ……大トラになってね。メンドラも出ますよ」——皆声を立てて笑うことは笑ったけど、すぐうつろに消えた……。

Kプロデューサーが、デンスケのスイッチを切り、ぼくたちは、口々に御礼をいって立ち上った。とたんに組合長さんはじめ、おばさんたちが、もう一度坐って、一緒にお祝いしてってくれ、とワァワァいう。もう乳色のシャボン玉のようなアブクをふいてるドブロクのとっくりがドンドン運ばれてくる。スルメに大豆の煮たの、それに精進あげ。ぼくたちは、何だかひどく泡くったような形でおばさんたちの手をふり切って外へとび出してしまった。県の二人は、ふんぎりのつかないようなかっこうで土間をウロウロしている。「ぼくたち、ほんとに、あと仕事があるんです」。——スロモーの

Kプロデューサーが、戸口でつかまって、拝むようなかっこうで、さけんでいる。「そうですかあ……」心から残念そうな顔の組合長さんと婦人部長さんが、子供の手を引いてリンゴ畠の外れまで送って下さる。何度ふり返ってもこっちを見て手をふっている。山畠の中の途が下りにかかる前、もう一度後を見ると、子供さんを中に、ひねこびたリンゴの木の間を、小屋の方へ戻ってゆくところだった。ちょっと肩を丸めるようにして、うつむき加減の組合長さんの後姿が、心なしか、とても淋しく、小さく、寒そうに見える。人間の暮しじゃない、といった、その暮しの中へまた戻ってゆくんだなあ、と思う。

7

ふと気がつくと、仲間は、ずっと下手の雑木材に入りかけている。オヤオヤと足を早めて、下りにかかる。すべっこい坂途、足許に気をくばりながらのせいか、今しがたきいてきたいろんな話の断片が、頭の中をキレギレになり、ゴチャまぜになりながら廻っている——「ゲ、ゲ、原始時代ですよ」ということばを軸にして。

前をゆく皆には、ジープの待っている橋の近くでようやくおいついたが、だれもさっきの印象を反すうしてると見えて、口もきかない。「おなかすいたな。お弁当にしようか」——すぐ腹のすくたちのぼくが、ボソッというけど、だれも反応しない。ゴソゴソとジープに乗ってしまう。出がけの車の中のうきうきと——男ばかりながら——花やいだ、とでもいいたいムードとは、打って変ってまるでお通夜みたいだ。運転手さんも、早く明るい下界に辿りつきたい、といわんばかりに、ガタン〳〵と飛ばす。分校をすぎて、しばらく下ると、小川のふちに低い松山が続いている。「あすこいいんじゃないですか」。Yアナが食料の入った段ボールを叩きながらいってくれる。ぼくはむろん賛成。松の間の暖かい日だまりの斜面に腰を下ろして、しばらくは、遅いひるめしをつめ込むのに夢中だ。Kプロデューサーが、モゴ〳〵口を動か

しながら、「県の二人は、とう〳〵来ませんでしたね」、いかにも慨嘆に堪えん、といった口ぶりだ。Yアナも、「すなおにごちそうになった方がよかったかなあって、下りの途に考えたんだけど、ともかくあの話きいたら、申訳なくって……。お役人は心臓だなあ」。「そうとばかりも言えないな、あの人たちは、ぼくらとちがって、いつも仕事の上で接触しなくちゃなんないんだし、一緒に飲んで、ムキダシの文句もきく、打あけた返答もする……それでいいんじゃないか」とS君。正義派のKプロデューサーは、呑みこめませんという顔をしている。

「しかしショックでしたね。うちのテレビ塔の真下にあんな暮しがあるなんて……」とりなし顔にYアナが話題を変える。「そんな山奥っていうんじゃないのにねえ、暮しのタイプも水準も、完全に僻地型だよね」とS君。ぼくもさっきから、モヤ〳〵と考えていたことを吐き出して見る。「そこが問題だね。ふつう僻地っていうと、すぐ自然条件のせいにしたがるんだ。ぼくは、ほんとの山奥の場合でも、そういう説明はマユツバだと思ってるけど、さっきのところなんか、何ていうかな……悪くいやあ人為的な僻地って感じだなあ。だからさ、僻地ってものは、悪い自然条件をのりこえるような、技術が進む、途がよくなるのに応じて減ってく――むろんそれが大勢なんだけど、それと逆の傾向も同時にあるんじゃないかな。例えばさ、高冷地農法が進歩するでしょ。もし原始生活でもがまんする、しなくちゃならん、ていう風に生活水準を一定にしとけば、いままでよりもっと山奥でも新しく人は住める、生きてけるよ。生きてるっていうだけなら。だから、そういう条件ができてるところへ下の村で次三男が喰いつめちゃうとか、まして、政府が、奨励するとかいう力が加われば、僻地は拡大するんじゃないかしら。戦後しばらく開拓開拓って旗ふって、ずい分山奥へ人を追いこんだし……あれは、S君、敗戦のあとすぐだっけ？」、社会政策の専門家にあとを頼む。「敗戦の暮じゃないか。あん時は、復員、軍需工場からの首切り、徴用解除、引揚げ、何しろ、千三百万位の離職者が出たのさ。対策っていえば、性こりもなく古い手でね、帰農三百万でしょ、土木事業でしょ、女二百万は家庭復帰さ。それと開墾四ヶ年計画って奴。入植百万戸とか

いってね。むろんホラなんだけど、百万戸も追い込まなくてよかったよ。」「そうそう、あの頃、ずい分叩かれた計画だったっけ。開墾は当面の対策としては、採算とれっこないんだし、長期的には、畑作農業中心でゆく以上世界中過剰になりそうで、外国と競争することを考えるとリスクが大きすぎる、ってね。」ぼくもひきずられて想い出す。「移民じゃなくて棄民、みたいなもんですか。」Kプロデューサーがブスッと口をはさむ。「戦後のドサクサまぎれにね。ウマウマ乗せられて、ウサギも通わぬ笹山に棄てられたばっかりに、十三年苦労して生活保護スレスレか……畜生」、S君が少し荒れてくる。「悪循環してますよね、あの暮し、どこからどこまで……」さっきから疲れた疲れた、とこぼしていたきき役のYアナがつぶやいただけで、皆だまってしまう。vicious circle, vicious circle……ぼくはサンドウィッチについてた楊子で、土の上にそんなことを書いていた。……「そろ〳〵いきましょうか。……ええとテープは、明日中に整理しときます。放送の時のコメントは、田添さん。いいですね。」Kさんは、まさにプロデューサーに立ちかえる。「ヘイヘイ」答えて腰を上げたぼくは、ねずみ色の雲をまとい始めた笹森山の方を見る。開拓地にほんとの春がくるのはいつかなあ、——皆もきっとそう思いながらであろう、しばらくぼくたちはそうして山に向って立っていた。

附記　笹平を訪ねたのは、昭和三十四年の春だった。最近、三十七年二月一日現在の調査に接する機会があった。ぼくはどうなったろう、と胸をドキ〳〵させて見入った。

全戸に電燈が入っていた。しかし松川町から電気導入について二十三万円だかの補助を受けるため、昭和三十年このかた溜めていた税金を完納するのに苦労したらしい。結局、皆で焼いた木炭を町役場にかつぎこんでかんべんしてもらったという。その他に、各戸七千円から八千円を負担した。

所得の方では、二戸だった二十万円以上クラスが七戸になり、平均十六万六千円に上った。しかし、この間三年間の物価の値

上りを勘定に入れ――それは県総合物価指数で、一〇・四％に達する――、そして人口が一〇二人から一二一人へ、二割ふえたことを考えると、実質上の暮らしは、前通りというより下ってきている、としか思えない。この三年間が、日本経済の高度成長の時期であるだけ、暗たんとせざるをえなかった。